

オペラ三つの時代

2018/07/02



オペラを観るときには、いつも「オペラ三つの時代」について考えておかなければなりません。すなわち、「原作が発表された時代」「オペラが初演された時代」「そのオペラを観ている私たちのいまの時代」の三つです。

1 原作が発表された時代:「なぜ、この時代に、この小説が刊行されたのか?」

リベルタン 1753年にこのオペラの原作『マノン・レスコー』(Manon Lescaut)が作者アベ・プレヴォ(1697-1763)によって発表されました。ときは、ルイ15世(1710-1774・在位:1715-1774)の時代で、王は多くの愛人を持っていて、私生活は奔放で「最愛王」(Bien-Aimé)とまで呼ばれました。サロンでは、公妾ポンパドゥール夫人とデュ・バリール夫人が活躍します。この18世紀は、「フランス文学における哲学者の世紀」(le siècle des philosophes)であり「啓蒙の世紀」(le siècle des lumières)である「理性の時代」でありました。しかし、それは同時に、「リベルタン」(仏 libertain: 放蕩者)の時代でもありました。「リベルタン」とは、その語源を「ローマ時

代の解放奴隷の子」(libertinus)にもち、もともと身分の低かった者がその身分さながらの低俗な倫理や道徳を体験している人物という悪い意味をいいます。ここでいう哲学者と放蕩者は、双方とも同じ、貴族や特権階級や金持ちではない、自由と実力を尊重する近代市民社会に生きる市井(しせい:街中)の近代人です。

書簡体の小説 小説『マノン・レスコー』の主人公は、貴族でもなんでもない一介の学生デ・グリュウです。それで、この小説はデ・グリュウの一人称に寄る語りがある貴族(作者のプレヴォ)が旅先で聞き書きしたものとなっています。さてそこで、アベ・プレヴォの業績のなかに数えられているのが、イギリスの小説家サミュエル・リチャードソン(Samuel Richardson、1689-1761)の書簡体小説を翻訳したことであることに注意しておく必要があります。リチャードソンはロンドンの出版業界を代表する大物の印刷業者でしたが、同業者から手紙の書き方の手本となる模範書簡集を書くように勧められて、物語風に脚色した一連の架空の手紙を手本として書いている内に一人称による書簡体の小説を思いつきました。代表作は、主人公の美しい小間使いが好色な若主人の性的誘惑をはねつけ、改心した若主人と結婚して地主夫人の地位に上り詰める『パミラ、あるいは淑徳の報い』(1740)です。『パミラ』は、古典主義的詩文学ではなく、散文で、それも分かりやすい手紙の文章で書かれていました。これが一般大衆に大当たりして、「近代小説の父」といわれるようになりました。

ロマン主義文学 プレヴォが、この『パミラ』の物語を、主人公の女を男にして、『マノン・レスコー』を書きました。プレヴォも、当時の特権階級の僧侶でしたが、異端の「レキジール(追放者)・プレヴォ」でした。リチャードソンにもっとも詳しい当時のフランス人はプレヴォです。その彼が、一人の若者の「燃え盛る情火の恐るべき実例」を一人称の聞き書きである「語り口」で、小説『マノン・レスコー』を一般大衆向けに分かりやすい文体で書いたのです。これが、男たちを破滅させる女「ファム・ファタール」(運命の女)を描いた文学作品として最初のものであり、恋する男の繊細な心理を余すところなく描いて「ロマン主義文学」の始まりとされています。

例えば、デ・グリュウは、金満家GMのもとにはしったマノンからのおわびの手紙を読みながら自己の心理を語るどころです。

これを読み終わった時の私の気持は、どうい筆舌に尽くしがたいものだった。なぜなら、今日といえども、あの時、私がいかなる種類の感情によって激昂したかが、いまだに分らないからである。それは、かつて人が同じ種類のものなど経験したこともないような、あの一様特別な心理状態の一つだった。それは、想像もつかない状態だから、他人に説明することなどできないだろう。自分自身に説き明かすことさえむずかしいくらいだ。というのは、性質上、それは、独白のものだったから、それは記憶の中で何ものにも結びつかないし、また、いかなる通念にも近づき得ないからだった。とまれ、私自身の心理状態がどんな性質のものであったにせよ、そこには、苦悩、怨恨、嫉妬、羞恥が入っていたはずであることは確実である。もう一つ、恋愛が入っていなかったとしたら、どんなに都合がよかつたらうに！ (青柳瑞穂訳)

騎士デ・グリュウの愛の破局物語

この『マノン・レスコー』の物語は、「私」（ルノンクール侯爵）が旅先のパシーの町で出会った「若い男」（騎士デ・グリュウ）から聞いた話になっています。パシーの町では、人々が大騒ぎをしています。12人ほどの売春婦がまだまだ未開であった植民地のアメリカへ流刑にされるべく港まで護送されて行くというのです。売春婦たちは胴のあたりを鎖でじゅずつなぎにされていて見るも哀れな姿でしたが、その中に際立って美しく、このような境遇が不似合いに思われる女がいました。私はなぜその女がこのような境遇になったのか、興味をそそられた。看守の一人に聞いてみると、「オピタル」（貧しい人や身寄りのない年寄りや精神病患者や女囚や売春婦などを矯正院で収容所）から引っ立てられて来た女だが、自分は詳しい事情は知らない、自分に訊くよりパリからずっと付き添って来た若い男に訊いた方がよくわかるでしょう、とのことでした。その若い男は粗末な身なりをしてはいたが、きちんと教育を受けた家柄の良さそうな青年であった。私はこれほどまでに悲嘆にくれている者を未だかつて見たことがない。私は青年に事情を話してくれるように頼みました。彼は、「自分の名前などはふせておきたいので身分については詳しいことは言えないが……」と前置きしながら簡単に事情を話してくれた。

その若者（騎士デ・グリュウ）は、学生であったとき美少女マノンと出会い、駆け落ちをします。浮気者のマノンは多くの男たちに愛されますが、マノンを愛した男たちは嫉妬やその欲望から破滅していき、若者も巻き込まれて数々の罪を犯します。ついにマノンは、アメリカへ追放処分となり、パシーの町まで連れられてきました。若者も彼女に付き添ってアメリカまで行きたいが、警官たちがお金を要求するので無一文の自分にはそれもできない」と嘆きます。「私」は彼の話に心を惹かれた。そして彼に多少の金を与え、また看守たちにも要求通りの金を与えて、彼が愛しい女に寄り添って港まで行けるように計らってやった。

そしてそれから2年近くが経ち、「私」は、この出来事のことはいっさりと忘れていたのだが、カレーの町に立ち寄ったときに、偶然にもあの若い男に出くわした。「アメリカから帰って来たばかりだ」と言う。2年前の事に恩を感じてくれていた若者は、あの囚われの美しい女性マノン・レスコーとの出会いからアメリカでの顛末まで、すべてを話してくれる事になった。2年前の事に恩を感じてくれていたその若者デ・グリュウは、あの囚われの美しい女性マノン・レスコーとの出会いからアメリカでの顛末まで、すべてを話してくれる事になった。

パシーの町で「私」が現れて助けてくれたので、デ・グリュウは、船に乗るまで何とかマノンに寄り添うことができた。彼は船長に「マノンとは夫婦だ」と話したので、船長は身分が高そうなデ・グリュウに同情して特別扱いをして船に乗せてくれた。航海は順調で、マノンも人が変わったように従順な女となったので、デ・グリュウの心は次第に落ち着いて来た。ニューオーレアンに着くと、マノンと共に流されて来た女たちは現地の青年たちにあてがわれた。しかし船長がデ・グリュウとマノンは夫婦だと話してくれたため、現地の司政官は二人が共に暮らせるように好意的に計らってくれた。マノンは今や良き伴侶となり、やっとマノンを自分の手のうちに捉える事ができたデ・グリュウは幸せだった。しかし、ここでもマノンをめぐって事件が起きて、二人は村を抜け出します。荒野をさまよう内に、ついにマノンは力尽き、寂しい砂漠でデ・グリュウの腕に抱かれて死にます。デ・グリュウは、友人の

チベルジュが商船に乗って迎えにきたのでフランスへ帰ろうと決意します。兄がカレーの近くの親戚の家で待っていてくれた。だが、父は心労のためすでにこの世の人ではなかった。

17世紀の文学者

ではここで、アベ・プレヴォ（仏 1697-1763 : 66 歳没）時代の文学者仲間をご紹介しますおきましょう。

ジョン・ロック（英 1632-1704 : 72 歳没）

ラファイエット夫人（仏 1634-1693 : 59 歳没）恋愛心理小説の祖『クレヴの奥方』（1678）

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ（独 1685-1750 : 65 歳没）バロック音楽

マリヴォー（仏 1688-1763 : 75 歳没）喜劇『愛と偶然との戯れ』（1830）

サミュエル・リチャードソン（英 1689-1761:72 歳没）書簡体小説『パミラ』（1740）

モンテスキュー（仏 1689-1755 : 66 歳没）『法の精神』（1748）

ヴォルテール（仏 1694-1778 : 83 歳没）

アベ・プレヴォ（仏 1697-1763 : 66 歳没）

ルソー（仏 1712-1778 : 66 歳没）『告白』（1764 ~ 1770）

フリードリヒ 2 世（独 1712-1786 : 74 歳没）

ディドロ（仏 1713-1784 : 70 歳没）

カサノヴァ（伊 1725-1798 : 73 歳没）自伝『我が生涯の物語』（1826）

エカチェリーナ 2 世（露 1729-1796 : 67 歳没）

ボウマルシェ（仏 1732-1799 : 67 歳没）

サド（仏 1740-1814 : 74 歳没）

ラクロ（仏 1741-1803 : 62 歳没）書簡体小説『危険な関係』（1782）

2 オペラが初演された時代:「なぜ、この時代に、このオペラが初演されたのか?」

1893 年、プッチーニは《マノン・レスコー》をトリノ王立歌劇場で初演しました。時代は、「ネオ・ロマン主義」の全盛期です。同時に、19 世紀の世紀末は、理想主義に代わって、自然主義の時代でした。すなわち、社会科学ではマルクス主義、自然科学ではダーウィニズム、人文諸科学では芸術至上主義といった「非個人的」なものが尊重される時代でした。特に、リアリズムや自然主義や写実主義が重んじられ、19 世紀初めの理想主義や社会主義や人道主義は否定され、ロマン主義は終焉を迎えました。それに代わって、病的な官能の興奮と恍惚と肉欲と破滅と死を賛美する「ネオ・ロマン主義」が生まれてきました。これは、「デカダン」（退廃主義）であり、「ニヒリズム」（虚無主義）です。そんなとき、アベ・プレヴォの『マノン・レスコー』がだれかによって、舞台芸術として復活されても不思議ではありません。女性賛美のオペラ作曲家プッチーニこそ、それにもっと

もふさわしい人物でした。

3 そのオペラを観ている私たちのいまの時代：「なぜ、いま、このオペラか？」

それは、21世紀が「演出の時代」だからです。上記の二つの時代をくぐり抜けて来た名作もすでに原作刊行から300年近く、オペラ初演から110年以上も経っています。いかに風雪に耐えて、「古典」として生き残ってきた人類の文化遺産にしても、この刺激の強い現代にあっては、陳腐と退屈のそしりを免れません。どうしても、新しい「価値」が必要となってきます。そこで求められるのは、新しい解釈による革新的な「演出」です。「古典」が「古典」でいきつづけているのは、古くからある人類の課題がいまだ解決されずに現代にそのまま残されているからです。ここではそれは、「理性と感情」「徳と墮落」の問題です。歌劇《マノン・レスコー》に見られる未解決のこの人類的問題は、先に見た「デカダン」と「ニヒリズム」となって現れてきます。

マノンとは、だれだったのか？ モスコ・カーナはいいます —（下線は解説者）

マノンは、彼女の恋人デ・グリュウなどよりは、ずっと単純な性格の女なのであるが、女性特有の誘惑に陥りやすい弱点を持っており、それがまた彼女の魅力となっているのである。彼女に似ているが、より粗野なスペインの、いわば彼女の従妹であるカルメンのように、彼女もまた、善悪の外に立っている女である。彼女は遺徳に背反しているのではなくて、遺徳の外に立っているのである。すなわち、彼女は全く本能のままの生きものなのであるから、自分の思うままに行動せずにはいられないのである。だから、デ・グリュウが「マノンは悪意を持っているのではないのです。ふしだらで軽率なのです。しかし、正直で、真面目です」と言っているのは、全く正しいのである。

マノン

manon

5幕6場のオペラコミック

[原 作] カトリックの僧侶で小説家のアベ・プレヴォ (1697-1763) の長編小説「騎士デ・グリユーとマノン・レスコーの物語」。

[台 本] フアンリ・メイヤック フィリップ・ジル

[作曲者] ジュール・マスネ(1842-1912)

[作曲年] 1881/1883年

[初 演] 1884年1月19日 オペラ・コミック座 (パリ)

[配 役]

マノン・レスコー (美貌の村娘) (ソプラノ)

騎士デ・グリユー (テノール)

伯爵デ・グリユー (騎士デ・グリユーの父) (バス)

レスコー (マノンの従兄・近衛士官) (バリトン)

ギョー・ド・モルフォンティエヌ (大蔵大臣) (テノール)

ド・ブレティニ (貴族) (バリトン)

[時・所] 1721年のフランス。アミアンとパリとル・アーヴルへの街道。

[構 成] 全5幕 [3時間42分]

第1幕 [40分] アミアンの旅籠の中庭。

第2幕 [25分] パリのアパート。

第3幕 [58分] 第1場 セーヌ河畔のレーヌ通り。

第2場 サン・ジェルピス神学校。

第4幕 [22分] ホテルの大広間。

第5幕 [17分] ル・アーヴルへ通じる街道。

[解 説]

バロック時代のフランスの作家で僧侶のアベ・プレヴォが書いた自伝的小説集「隠遁したある貴族の回想と冒険」(全7巻)の最後の第7巻にあるのが、浮気者の美少女マノンを主人公にした「ファム・ファタール」(男たちを破滅させる女)の物語です。この第7巻は世間の輦轡を買い、たびたび発禁処分になりました。僧院から逃げて英国に亡命したアベ・プレヴォは、「私が修道院の生活を捨てたことを非難する人がいるがその非難は私には当たらない。私は僧院生活に向くように生まれてはいないので誓えない誓願などはたてたことではない」といっています。そんな危険な物語をフランスの作曲家ジュール・マスネが作曲。舞台はパリを中心としたフランス各地。まさにフランスの文化と厳格な宗教とフランス人の自由な「エスプリ」(精神)が混在するフランスならではのオペラです。この歌劇が初演された1884年はワーグナーが亡くなった翌年であり、ヴェルディが16年間の長い沈黙を守っているときでした。当時のフランスのオペラ作曲家といえば、パリ音楽院の師トマ(1811-1896)、グノー(1818-1893)、オッフェンバック(1819-1880)、サン＝サーンス(1835-1921)、ビゼー(1838-1875)でした。マスネ(1842-1912)はそのフランス・オペラ黄金期のしんがりにいる幸福なフランス・オペラの遺産相続人でした。マスネのこの歌劇《マノン》には、トマの厳格な対位法とグノーの華麗な旋律とオッフェンバックのユーモアとビゼーの「ヴェリスモ」(現実実感)といったフランス・オペラの栄光がみなぎっていて、イタリア・オペラとドイツの楽劇を凌駕している奇妙な例です。

歌劇《マノン》人物表

<p>妖女マノン</p> <p>遊び好きな少女。困った両親が修道院へ送り込もうと馬車にのせたものの、途中で出会った騎士デ・グリユーを誘ってパリへ駆け落ちします。二人でこっそりとパリで暮らしていてもマノンは他の金持ちの男性を情夫にして高価な装飾品を身につけ始めました。その情夫がデ・グリユーの居場所を家族に教えデ・グリユーは家に連れ戻されます。デ・グリユーは神学校へ入れられますがマノンは彼を訪ねます。また二人はパリで暮らすことになりました。二人は賭博所でいかさまをしたとして逮捕されます。デ・グリユーは父親の力で釈放されますがマノンは売春婦とされてアメリカへ流刑と決まります。一緒にアメリカへいったデ・グリユーに看取られて息絶えます。</p>	<p>騎士デ・グリユー</p> <p>貴族の名家の息子で学業を終えて父の待つパリに戻る途中の17歳の若者。「幸福になることを拒む若い盲目の男。自ら進んで最悪の不幸に飛び込んでいく若者。この上もなく輝かしい値打ちをつくる一切の長所を具えていながらわざわざ自然と幸福の提供するすべての利益を捨て、世を忍ぶ流浪の生活を送る若者。自分の不幸を見抜いていながらこれを避けようとしないう。不幸が身にこたえ、不幸に押しひしがれていながら、絶えず提供されている対策、いつでもその不幸を終わらせることのできる対策を用いようとしないう。要するに不可解な性格、徳と悪徳との混淆、良き意志と悪しき行為との不断な相克。これが私が提供しようとする絵の背景である」(プレヴォ)</p>
--	--

<p>従兄レスコー</p> <p>パリで思いがけず逃げたマノンを見つけます。彼はお金のないデ・グリユーにいかさま賭博を教えデ・グリユーは賭博で勝ったお金で一息つきレスコーに感謝します。悪行の多いレスコーは仇にピストルで撃たれ死にます。</p>	<p>大蔵大臣ギヨー</p> <p>マノンの魅力に負けた老ギヨーは従兄のレスコーの手引きでマノンを手に入れます。マノンをデ・グリユーから引き離すためにギヨーは賭に勝ったデ・グリユーをいかさまだと訴えマノンも共犯者として逮捕されます。</p>	<p>貴族ド・プレティニ</p> <p>マノンを愛する一人。ド・プレティニはマノンの兄の助けを得てマノンをデ・グリユーから力づくで奪います。人のいいド・プレティニはマノンのために伯爵デ・グリユーから息子が神学校にいることを聞き出してやります。</p>	<p>父伯爵デ・グリユー</p> <p>息子が悪い女のとりことなり、将来ある人生を失っていくのを見ておれず、あらゆる手段を用いて救おうとします。しかし、息子はそのすべての救いから逃れて墮落していきます。万策尽きた父は失意の内に亡くなります。</p>
--	---	--	---

原作者アベ・プレヴォはいいます — 「ここに見られるのは輝かしい限りなく愛すべき長所を持った一人の若者が、気に入った娘に対する気ちがいじみた情熱のためにひきずられて、彼の才能と身分の約束するいっさいの利益を捨てて放蕩と放浪の生活を送り、不幸を予見しながら、それを避けるための所置をとる力のない不幸な恋の奴隷となる図である。まことに奇怪な性格と言わねばならぬ。マノソの性格にいたってはいつそう奇怪である。彼女は美德を知っており、美德の楽しいことも味わっている。それにもかかわらず、世にもいまわしい行為を犯す。激しい情熱でデ・グリユーを愛しているながら、ぜいたくな暮らしをし派手にふるまいたいという欲望がデ・グリユーに対する感情を裏切らせる。この墮落した娘の身の上にかかる不運のことで、読者に同情の念をおこさせ、読者の興味をつなぐには、どれほどの技術を要したか知れないではないか！この作品の文体については何も言うまい。わかりにくい言葉も、てらったところも、こちたき議論もそこにはない。まさに自然そのものが筆をとって書いていると言うべきである。しゃちこぼった飾りたてた著者がこれにくらべるとなんと憐れに見えることか！」。